

はすかしの僕と助けたい僕

伊勢原市立 伊勢原小学校

五年三組 萩原 隼翔

僕の兄は、今年の1月にシバー病とい  
うかかしの骨に炎症が起こる病気でギブス固定  
しなければいけなくなり、松葉杖で二カ月間  
生活していました。

登校する時は父に車で送ってもらい、下校  
では学校に許可をもらいバスを利用していま  
した。母に「今日はむかえに行けないから、  
帰りに一緒に帰って荷物持ってもらってと頼ま  
れましたが、友達と帰りたいから、たし面どうが  
いやでした。

兄はランドセルが背負えないのでリュック  
を使っています。じょう降口で待ち合わせ  
して一緒に帰る時、みんなに見られて目立っ  
ていたのびともはずかしくていやな気持ち  
になりました。

でも兄は僕に「荷物を持ってくると歩  
みやすくて助かるよ。ありがとう」と言っ  
てく

れました。ふと気づいたら、兄は人目を気にせず堂々と歩いていました。冬なのに顔に汗をかきながら一生けん命歩いてくる姿を見たら、はすかしいと思っ。ていた僕の気持ちか申しあげなくて何も言えませんでした。仕事から帰って来た母に「今日はありがたういびき大変そうだったでしょ？」と言われ僕には正直に「みんなに注目されていやだ。たんだよね。」いびきははすかしくないのかな？」と言った。母は「ういん、はすかしい気持ちよりも必死な人だと思っ。足をケかして不自由だけい前向きに頑張っ。てるからさ。いやだ。たり一緒に帰らなくて大丈夫だよ、ありがとね。」と言われ荷物を持つだけで兄の助けになるなら、明日もかんばろうかなと思っました。身近に困っ。ている人がいて初めて気付くことが沢山ありました。福祉は自分か出来るは人いご出来ることを強制されずにすることが相手にとっ。ても受けとりやすい助けになるのた。と感っしました。